

水稻主要害虫の発生の特徴と対応

トビイロウンカは普通期栽培品種で2013、2014年と多発した。本田防除にはイネの株元に薬剤が届くように散布することが重要である。ヒメトビウンカが媒介するイネ縞葉枯病は、西播磨地域で増加傾向である。防除には殺虫剤の育苗箱施用で初期からのヒメトビウンカの密度を抑えることが重要である。

内 容

水稻の主要害虫の被害は、トビイロウンカによる坪枯れとヒメトビウンカに媒介される縞葉枯病である。

トビイロウンカは海外から飛来するが、7月に飛来した場合、9月中～下旬ごろに3世代目を迎え、坪枯れを起こすほどの高密度に増殖する。被害を受けやすいのは収穫が遅い「ヒノヒカリ」「山田錦」など普通期栽培品種である。最近では、2013、2014年に県下広域で坪枯れが発生した。2013年は、生育に好適な気温（24℃前後）が10月上旬まで続き、3世代目の増殖を助長したと考えられる。2014年は7月上中旬に広域に飛来があったと考えられ、9月上旬には発生圃場率が県平均95%（平年比31倍）に達した。

いずれの年も育苗箱施用殺虫剤の残効が失われてくるころの飛来であった。本田防除は、薬剤が生息場所である株元に届くよう散布することが重要である。

ヒメトビウンカは吸汁被害をほとんど与えない



写真1 水稻に群がるトビイロウンカ

が、イネ縞葉枯ウイルスを保毒した場合に問題になる。最近、西播磨地域を中心にウイルス保毒虫率が増加傾向を示し、10%を超える地点もある。ヒメトビウンカは畦畔のイネ科雑草や小麦圃場で増殖した後、水田に侵入し、ウイルスを媒介する。病徴は、生育初期の新葉の黄白化、下垂（通称：ゆうれい症状）及び出穂異常である。

防除について、初期発病の抑制には、殺虫剤の育苗箱施用により7月上旬のヒメトビウンカを低密度に抑制することが重要である。また、発病株は抜き取りを行い、収穫後は水稻刈り株や周辺イネ科雑草はヒメトビウンカの越冬場所になるため、すき込みや雑草管理を行う。

今後の方針

縞葉枯病については、イネ収穫後の保毒虫率の変動や刈り株のすき込み適期などを調査し、的確な発生予察情報を発信していく。

柳澤 由加里（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）



写真2 ヒメトビウンカ（左）と縞葉枯病の病徴（新葉の黄白化と下垂）（右）